書評

白方佳果著『泉鏡花作品研究――同時代背景の注釈的検討を通して――』

京都、臨川書店、二〇二〇年、一九〇頁、三、八〇〇円＋税
ISBN：978-4-653-04416-1

中村健史
Takeshi Nakamura
神戸学院大学人文学部

白方佳果氏は泉鏡花を中心とする近代文学の研究者である。昨年はじめての著書として、臨川書店から『泉鏡花作品研究――同時代背景の注釈的検討を通して――』を上梓した。

評にあたって、まずは内容をかんたんに紹介しておきたい。

第一部で取りあげられるのは『錦帯記』である。といっても、『婦系図』や『高野聖』のように有名な作品ではないから、一応のあらすじを紹介しておこう。私娼から高利貸にまで成りあがった主人公お礼は、詐欺にあって財産を失い、残された家作で暮らしを立てている。かつて彼女に恩を受けたことのある時次郎がその身なりをあわれんで帯を贈るが、長屋の店子たちは二人の仲を疑い騒動を引きおこす。遺骸となったお礼を前に、時次郎は「一層此死骸と結婚しないか」とすすめられる。

お礼の人物像については、先行研究によって滝夜叉姫の面影が指摘されている。しかし、著者はむしろ作中に登場するマニラ煙草「イサベラ」に注意をうながす。レッテルに描かれた女王像（スペイン女王イサベル二世）は「お礼と肖（に）て」おり、さらに彼女は「まやかしもの、和製」煙草をつくって「汝（うぬ）が像を、写真で入れ」売りだした過去があった。一方『錦帯記』が発表される前年には、マニラ湾を舞台に米西戦争が勃発し、たった四箇月のうちにスペインが敗北している。お礼が死んだのは、休戦の成立した八月十二日。すなわち鏡花には女主人公の零落を「日の沈まぬ国」の衰運に重ねあわせる意図があった（第一章）。

『錦帯記』にはもうひとつ重要な小道具が登場する。時次郎が贈った蝦夷錦の帯（ただし「まやかしもの」）だ。白方氏は綿密な調査によって、当時これを利用した詐欺が横行していたことをつきとめ、作品を以下のように読みとく。「まやかしもの」であることがお礼の半生を暗喩していることは明らかだが、それだけではない。「もう一度ぐらゐ圧（おし）は利きますよ」と考えた彼女は、もらった帯をしめて店子たちと対峙する。にせの蝦夷錦は「過剰な自尊心」「虚勢」の象徴でもあった。すなわち、帯をすすめる時次郎の「綺麗だから可（い）いでしやう、輝いてるから立派に見えますよ」という言葉は、お礼の「虚勢をはって一途に生き、挫折した」人生への肯定であり、物語の最後にあらわれる救済なのだろう（第二章）。

第二部は『霊象』論。これも世に知られた作とはいいがたいが、いかにも鏡花らしい佳篇である。窮迫のすえ夫から心中を持ちかけられた主人公美波子は、いったん承知しながら、幼なじみ志摩吉との再会をきっかけに迷いが生じ、死にお

くれてしまう。不義をうたがわれた二人は、殺人者として裁かれ、はげしい社会的糾弾を受けるのだった。美波子が監獄を出る日、興奮する群衆の前に志摩吉と白象があらわれ、彼女を「長に続くべき奇怪なる新婚旅行」へ連れさってゆく。

著者はまず美波子夫婦にモデルがあること、また小説の舞台、なかんずく監獄の描写が金沢を思わせることなど指摘したうえで、主人公たちの事件が「悪三郎とか云ふ一大毒殺事件があつた処から」「第二の大何三郎と標題を置い」て報道された点に着目する。「悪三郎」は野口男三郎のあてこみで、『霊象』が書かれた前々年、殺人未遂の容疑で逮捕され、新聞紙上をしきりに賑わせた有名人であった。鏡花はそうした世相から「「スキャンダル装置」としての新聞報道」――刺激的でありさえすれば憶測をもいとわず記事にし、大衆の好奇心をあおる――という視点を得、作品のなかに持ちこんだに違いない。美波子と志摩吉もまた、加熱するジャーナリズムのなかで「夫を毒殺した密通者」という虚像がかたちづくられ、人々の義憤を駆りたててゆく（第三章）。

美波子に対して、社会はしかるべき制裁を求めてやまない。出獄する彼女を尼寺に押しこめようと群衆が押しよせるなか、「口上いひ」に扮した志摩吉が白象に乗って登場し、救出劇が繰りひろげられる。従来、仏教説話や能『江口』との関係が論じられてきたこの場面について、白方氏は新たにベルヌ『八十日間世界一周』からの影響（寡婦殉死を強いられた美女を助けだし、象に乗って逃げる）を指摘し、俗世の常識や因襲に逆らって愛をつらぬく人間像を見出す。「人を見世物化する「スキャンダル装置」や世間のために、秘めた想いを衆目に晒され、さらにはそれを罪として「地獄」に堕とされた美波子たちは、「世の掟」に従わず見世物師となることで、「不埒な畜生」として恋を成就させる」（第四章）。

第三部は戯曲『恋女房』を扱う。主人公お柳は引手茶屋の娘。吉原を焼きつくした大火に心を痛め、夫とともに婚家を去って廓の再生を誓う。だが、二人は火をあやつる妖魔「赤魔婆」のために高熱に苦しめられ、体ごと氷づけにする荒療治で一命をとりとめる。病癒えたお柳たちはすっかり茶屋の主人らしくなり、しつこく迫りくる赤魔婆も退けられるのであった。

『恋女房』は一九一一年の吉原大火に取材しており、時事色の濃い作品といえるだろう。ただし「一夜の内に、又もとの、廓は極楽浄土と成らう」と示唆される復興はかならずしも実態を反映しない。白方氏によれば、吉原は当時すでに凋落のきざしを見せており、小説家が描いたのは「現実では果たされなかった、あるいはもう果たされないであろう夢」であった。お柳夫婦が氷づけにされる場面は一種の心中と解釈できるが、遊女のように「無縁の投込みに成る身体」を経験することで、彼女は「吉原の女」としてよみがる（心中した女郎は投込み墓に葬られる）。それはありえない夢を成就させるための「試練」と位置づけうるのではないか（第五章）。

以上五章、いずれも鏡花の小説、戯曲をつぶさに考覈してあますところがない。行論はほとんど注釈と呼んでさしつかえないほどの精密さであって、大小の新聞、雑誌はもとより、稗史戯作のたぐいから地誌、伝記、風俗書にいたるまで著者はひろく資料をたずね、作品の基盤を明らかにしようとする。ややもすればテキストを離れた読みにはしりがちな近代文学の研究にあって、実証的な姿勢は高く評価されるべきだろう。

けれども、本書の功績は何よりもまず、丁寧な調査を通じて作品の新たな魅力を引きだしたことにある。まやかしのうちに生きる女の意地とあわれさ、むごさに思いいたらねば、『錦帯記』は趣向だおれの凡作であろう。見られるという辱めが一転して恋の凱歌となる構成の妙に気づかなければ、『霊象』はただのおとぎ話に過ぎない。著者は読みと実証を二つながら追求し、ためらうことなく文学の本道を歩む。行くに径によらざる志はじつに爽快である。

さて、副題にも示されているとおり、本書のねらいは単に「注釈的検討」を積みかさねるのでなく、そこに「同時代背景」という視点を導入し、全体の統一をはかろうとした点にあった。

> 鏡花文学の同時代性の問題は、現在、検討すべき課題として様々な視点から検討が進められている。とはいえ、前近代の文芸との関係については精緻な実証的研究の成果が蓄積されてきたことに比べると、同時代性の問題に関しては、未だ看過されているところが大きい。（中略）以上のような現状を踏まえ、本書所収の論文では同時代の状況、とくに時事的な話題の摂取が見過ごされてきた、あるいは注意を払われながらも十分に論じられてこなかった

鏡花作品三作『錦帯記』、『霊象』、『恋女房』をおもな検討の対象とし、注釈的な検討を基盤とした作品論を試みた。

（はじめに）

たしかに鏡花といえば、だれしもが能、歌舞伎、読本、草双紙、あるいは怪談や民間伝承といった「前近代の文芸との関係」を思いうかべるだろう。作家が生き、作品が書かれた時代相についてはおのずから等閑に付されがちだったこともあり、近年ではもっぱら「時事的な話題の摂取」に関心が向かいつつある。『泉鏡花作品研究』もかかる流れに棹さし、「同時代性の問題に関して」「精緻な実証的研究」を試みるものだった。イサベラ煙草や蝦夷錦の詐欺、野口男三郎事件などは、その重要な成果にほかならない。

もとより、時とともに研究が深まりを見せてゆくのはよろこぶべき傾向である。しかし評者の立場からすれば、前近代性と同時代性を対立的にとらえる枠組みにはなお検討すべき余地があるように思う。鏡花にとっての「前近代」とは、要するに江戸のことであった。そして近世文学の場合、前時代的なもの（雅）と同時代的なもの（俗）は相反することなく融和し、お互いに刺激を与えながらひとつの世界を形づくっている。平親王将門が忘れ形見滝夜叉姫は、身をやつして傾城如月とはならなかったか。源頼信に仕えるはずの大宅太郎は、島原に遊んで「三の切れたる三味線も、弾かるるほどは弾いて見ん」という通人ぶりを見せはしなかったか。王朝の昔を語ろうとしてなぜか現代の色町が登場するところに、歌舞伎や草双紙の魅力がひそむ。戯作者たちの眼には、今と昔、当世ぶりと古典世界が二重うつしになっていた。

そうした意味では、じつは鏡花こそもっとも江戸的な作家なのである。『錦帯記』のお礼に大時代な見得を切らせながら、近ごろのはやりのイサベラ煙草や蝦夷錦を小道具にあしらう呼吸は、まさしく春水や黙阿弥の流れを引くものであった。うつろいゆく明治風俗を背景に、張りと意気地に生きる女が伝統的類型として描かれてゆく。あたかもそれは深川の裏長屋に暮らす丹次郎が、はるかに業平の面影を受けつぐのと軌を一にしよう。「鏡花は前近代の文芸を独自の感性で作品に取り込む一方で、同時代の事象にも強い関心を持ち、それを自らの創作にたくみに取り入れた」（はじめに）のは事実だが、もし「一方で」が「にもかかわらず」の謂いだとすれば、かならずしも正確な理解とはいえまい。「前近代の文芸」と「同時代の事象」がごく自然に同居しているあたり、鏡花はすでに前近代的（江戸的）なのである。

今後の鏡花研究は、緻密な実証性もさることながら、近世的な文学観とのかかわりを含め、全体をよりひろい視野からとらえなおす必要がある。白方氏のこれからに期待したい。